

令和 2 年 6 月 28 日現在

機関番号：30102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02623

研究課題名(和文) ソヴィエト後のロシア・ポストモダニズム文学における身体イメージの変容

研究課題名(英文) Changes of body images in Russian postmodern literature in post-soviet era

研究代表者

岩本 和久 (IWAMOTO, Kazuhisa)

札幌大学・地域共創学群・教授

研究者番号：40289715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：現代ロシア文学の最新の動向についてリサーチし、毎年『ブリタニカ国際年鑑』にレポートを掲載した。その上で、ロシアのポストモダニズム文学を代表するソローキンやペレーヴィンらによる1990年代の創作、2000年以降の創作のそれぞれについて、記号や全体主義と身体との関係を考察し、日本ロシア文学会のパネルディスカッションで報告を行なった。

また、文学的想像力も利用している現代ロシアのアートについて、特にペッペルシテイン、AES+F、クリーク、パヴレンスキーらの創作を検討し、その政治性やセクシュアリティを明らかにし、ウランバートル、京都、東京などの国際シンポジウムで報告を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代以降のロシア・ポストモダニズムについては、紹介や概説という段階はすでに完了している。本研究ではロシア・ポストモダニズム文学に現れた身体イメージを分析しながら、性、政治、記号論など様々なテーマを顕在化させた。これにより、今後のより深い作品分析のための切り口を見出した。

一方、日本において十全な紹介のなされていないロシアの現代アートについても調査を行い、特に身体イメージについてその政治性を考察した。

研究成果の概要(英文)： This research focused on recently published Russian novels and poetries. The works of V. Sorokin and V. Pelevin, important writers of Russian post-modern literature, and the changes of their texts during post-Soviet era were analyzed to discuss the relationship between signs and bodies as well as totalism and bodies. The results of this analysis were presented in a panel discussion of the Japanese Association of Russian Scholars.

Contemporary Russian arts, which use literary imagination, were also studied. The works of P. Pepperstein, AES+F, O. Kulik, and P. Pavlensky were examined, focusing on their sexuality and politics, and the results of the study were reported at international symposiums held at Ulaanbaatar, Kyoto, and Tokyo.

研究分野：ロシア東欧文学

キーワード：外国文学 美術史 ロシア ポストモダニズム 身体

### 1. 研究開始当初の背景

社会主義体制下のソヴィエトにおいては、社会主義体制を支える理想化された身体が求められた。ところが、1991年にソヴィエト体制が終わりを迎えると、社会の支配的理念を相対化するポストモダニズム文学や、現代アートの世界で、生身の身体物質性が強調されるようになった。小説の後半になって唐突に登場人物全てが殺害され、身体を解体されてしまうソローキンの長編小説『ロマン』(1995)あるいは自らを犬とみなし裸体のパフォーマンスを行ったアーティスト、オレグ・クリークは、この時代を特徴づけるものである。その後、21世紀に入ってから文学作品やアート作品では、身体イメージの政治性が強調されるようになった。

現代ロシアのポストモダニズム芸術は、1980年代以降は日本においても望月哲夫、亀山郁夫、鈴木正美、鴻野わか菜らにより、同時代的に紹介がなされてきた。そうした時期から20年を経た現在は、本国ロシアでも当時の芸術運動の回顧展が繰り返し開催されるなど、紹介の時期から研究の時期に移ってきていると言える。

### 2. 研究の目的

ソ連後期から2010年代にかけてのロシアのポストモダニズム文学・アートの分析を通して、そこに見られる身体的表象の意味や役割、それらの時代を追った変化を考察し、現代ロシア文化の一端を明らかにしようとした。

社会主義体制が崩壊し、社会を支える理念や物語が失われたロシアの文学やアートにおいては、身体そのものへの関心が顕在化した。資本主義社会の価値観の浸透、強権的なプーチン体制の成立といった社会の変化は、作家やアーティストの身体観を変化させている。本研究では、現代ロシア文化における身体観の変化、思想や芸術と社会との相関関係を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究では先行研究を参照しながら、ロシアの現代文学や現代アート作品に登場する身体イメージの分析を行い、ソ連解体後のロシアにおける文化変容を明確化することを試みた。

国内の資料や海外で刊行された文献資料の収集に加え、モスクワやロンドンの美術館やギャラリー、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ポローニャ歌劇場において現代ロシア・アートについての資料調査を行った。

研究体制としては、代表者の岩本和久が研究全体の計画と統括を行ない、分担者として戦争や災害をめぐる身体表象を専門とする越野剛が加わった。また、ロシア・ポストモダニズム文学の専門家である松下隆志と笹山啓、現代ロシア・アートの専門家である生熊源一に協力を仰いだ。

### 4. 研究成果

(1)研究全体の基礎として、現代ロシア文学の最新の動向についての調査を行った。それらを通して、ポストモダニズム文学の最新の展開(ヴィクトル・ペレーヴィン『iPhuck10』、ヴラジーミル・ソローキン『マナラガ』)、歴史小説(グゼリ・ヤヒナ『私の子どもたち』、エレナ・チジョフ『記憶で書かれた町』)、ドキュメンタリー(レフ・ダニルキン『レーニン』、オレグ・レクマノフ、ミハイル・スヴェルドロフ、イリヤ・シマノフスキー『ヴェネジクト・エロフェエフ』、マリヤ・ステパーノヴァ『記憶の記憶』)などの諸動向を明らかにした。

また、スポーツ選手の身体とその欠損を主題としたオリガ・スラヴニコヴァ『走り幅跳び』についても、現代社会のスポーツ観を示す例として、詳細に検討を行った。世界記録を期待されていた陸上選手が、道路に飛び出してきた少年を救うため、公道で世界記録よりも長い距離を跳躍したものの、自動車にひかれて両足を失ってしまう。救われた少年はやがて不良になっていき、障がい者になった主人公を破滅に追いやる。物語性や運命の残酷さへの関心はこの作家らしいものだ。ロシアでは2013年の世界陸上、2014年のソチ五輪と国を挙げてのスポーツ大会が続いた後、ドーピング問題に揺れたわけだが、国際大会でのアスリートの活躍ではなく、損なわれた身体や夢の挫折を通してスポーツが表象されているのは興味深い。この作品において、身体とは何よりも痛みや災厄の現れる場なのである。

上記の成果は、『ブリタニカ国際年鑑』2018年～2020年版の「ロシア文学」の項目として発表した。

(2)本研究の中心課題であるロシアのポストモダニズム文学については、まずポストモダニズムを代表する作家のヴラジーミル・ソローキンとヴィクトル・ペレーヴィンについて、1990～2000年代の創作を再確認した。これについては、2018年7月にモンゴル・ウランバートル市で開催されたスラヴ・ユーラシア研究東アジア大会において、彼らの作品に描かれた東洋イメージ、たとえばペレーヴィン『チャパーエフと空虚』に描かれた彼岸のイメージや、ソローキン『氷三部作』に登場する東京のイメージを軸に報告を行なった。

その上で、彼らの最新の作品である『マナラガ』や『iPhuck10』を参照しながら、それぞれの作家の身体観についての考察を行った。この作業については、ソローキン、ペレーヴィンそれぞれについて本格的に取り組んでいる若手研究者の松下隆志、笹山啓にも協力を仰ぎ、最終的に2019年10月の日本ロシア文学会におけるパネルディスカッション「ロシア・ポストモダニズム文学の身体観」で報告を行なった。

ソローキンはグロテスクな肉体や排泄物を誇示することで、ソ連の公式的な言説空間を破壊していたが、21世紀に入ってから『氷三部作』や『テルリア』においても神秘的な身体改造が主題となっており、社会風刺において身体は重要な役割を担っている。

上記のパネルディスカッション「ロシア・ポストモダニズム文学の身体観」において松下隆志は、言葉から意味をはぎ取ることで文字そのもの、すなわち、物質的な文字（文字の身体）をあばき出そうとするのが、初期から一貫したソローキンの方法であり、近未来での焚書を主題とした『マナラガ』においてもそれは変わらないと指摘した。ソローキンにおいて物質は意味と対立するグロテスクな存在であり、身体もまた、しばしば意味を失い、生々しい物質と化すのである。人間性を尊重する人文主義や啓蒙主義を支えた意味を、身体に見出したり、消去したりする試みが、ソローキンがその創作で実践していることなのだ。

一方、現実を超えた次元の奔流に意識が合流することを、現生からの解放として賛美するペレーヴィンの作品においては、身体は意識を捉える牢獄として把握されることになる。近年のペレーヴィンの作品では、人工知能を扱った『iPhuck10』のように、そもそも言説が身体とは切り離されて流通していることさえある。笹山啓はパネルディスカッション「ロシア・ポストモダニズム文学の身体観」において同様の認識のもと、全体主義的な集団的身体から逃走をはかる主体として、ペレーヴィンの主人公を位置づけた。

ソローキンは意味を書いた身体を志向し、ペレーヴィンは逆に身体からの離脱を志向する。この二つの逆方向の志向を両義的な形で含んでいるのが、パーヴェル・ペッペルシテインの創作だ。ペッペルシテインはモスクワ・コンセプチュアリズムの芸術家だが、アート作品だけでなく小説も執筆している。

イリヤ・カバコフをはじめ、モスクワ・コンセプチュアリズムの芸術家の多くがアート作品の前景から身体を消去しようとするが、ペッペルシテインはむしろ、性的な身体を前景に出そうとする。他の身体と合一したり、また、マイクロコスモスとして他の身体を包摂したりするのが、ペッペルシテインの身体の特徴だが、上記のパネルディスカッションでは岩本和久がペッペルシテインの短編小説「地獄の裏切り者」を例に、この特徴を論じた。

短編小説の主人公となる恋人たちは、宇宙を構成する複数の層の間に設定された天国で永遠の生を送るためあえて死を選び、この天国で身体を合一させる。身体性への接近と、地上の肉体からの精神の離脱という二つの志向がペッペルシテインの創作において共存していることが、この短編小説では端的に示されている。

混沌とした1990年代から2000年代にかけて、ソローキンもペレーヴィンもソ連文化のパロディーから現代ロシアの風刺へと作風を変化させた。その題材の変化をもたらしたのは、強権的なプーチン体制の成立なのだが、いずれの作家も文学観や創作方法を根本的に変化させたわけではなく、言語と身体をめぐる揺らぎをその創作の中で反復していると言える。

(3) ペッペルシテインはアーティストだが、ソローキンもまた、コンセプチュアリズムのアーティストとして出発している。そのように現代ロシア文学はロシアの現代アートの流れを汲むものでもあるため、本研究では現代ロシアのアート作品、特にその身体観についても調査を行い、諸傾向を明らかにした。

具体的にはテート・モダン（ロンドン）でのカバコフ回顧展「誰もが未来に連れて行ってもらえるわけではない」展、サーチ・ギャラリー（ロンドン）での「Art Riot」展、ギャラリー「カルバート 22」（ロンドン）でのプリゴフ回顧展、美術館「ガレージ」（モスクワ）でのペッペルシテイン展「風景画の枠としての人間」、アート集団 AES+F がビデオを担当しているオペラ「トゥーランドット」（ボローニャ）、2019年のヴェネツィア・ビエンナーレで資料収集を行い、その成果を『札幌大学総合論叢』やスラヴ・ユーラシア研究東アジア大会（2019年6月、東京大学）で報告した。特にソ連解体直後の社会混乱を自らの裸体で表現したオレグ・クリーク、クリークと同様の実践を直接的な政治的主張と共に行っているピョートル・パヴレンスキー、性差別や民族差別の主題をファッショナブルな映像で描いている AES+F の実践について、詳しい紹介を行った。

アート作品においては文学作品よりも政治的な主張が顕著だが、これは特に今世紀になってから世界的に大きな潮流となった、ポリティカル・アートの動きに沿ったものと言えるだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名	4. 巻 46
2. 論文標題 AES+F	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 札幌大学総合論叢	6. 最初と最後の頁 137-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 越野剛	4. 巻 8
2. 論文標題 接吻と白鳥とソ連映画 『1918年のレーニン』の中国における受容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岩本和久	4. 巻 20
2. 論文標題 ソヴィエト文学と主人公	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アリーナ	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 越野剛、田村容子	4. 巻 7
2. 論文標題 連環画の中のソ連：女性兵士の物語『朝焼けは静かなれど』の受容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 連環画研究	6. 最初と最後の頁 48-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 岩本和久
2. 発表標題 Body Politics in Contemporary Russian Art and Literature"
3. 学会等名 スラヴ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンス
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩本和久
2. 発表標題 コンセプチュアリズムとペッペルシテインの身体観
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松下隆志
2. 発表標題 ポスト・ゲーテンベルク時代の書物の運命 後期ソローキンの作品における文学の身体性をめぐる考察
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹山啓
2. 発表標題 ペレーヴィン作品における「身体」の概念の弱さ
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Go Koshino
2. 発表標題 Revolutionary Drama in Belarus and Ukraine
3. 学会等名 Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies
4. 発表年 2019年

1. 発表者名
2. 発表標題 "
3. 学会等名 East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazuhisa Iwamoto
2. 発表標題 Litvak, Brynner and Dance
3. 学会等名 フォーラム「移民学とスラヴ学」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Go Koshino
2. 発表標題 Illness and Fire: Rethinking a Nastasia 's Emotional Behavior in The Idiot
3. 学会等名 The Problem of Emotion in Nineteenth-Century Literature: Dostoevsky, Other Writers and Beyond
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Go Koshino
2. 発表標題 Post-Apocalyptic Shift in Soviet Science Fiction of the Early 1980s
3. 学会等名 Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名
2. 発表標題 " 1918 "
3. 学会等名 East-Asian conference on Slavic-Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 越野剛
2. 発表標題 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ作品の形式的側面について
3. 学会等名 シンポジウム「文化の汽水域～東スラヴ世界の文化的諸相をめぐって～」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 越野剛
2. 発表標題 Image of Belarusian Village War in Ales Adamovich 's Literary Works
3. 学会等名 Workshop "Heu auf dem Asphalt. Topoi Belarussischer Selbstverortungen" (Potsdam University, Germany) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 越野剛、田村容子
2. 発表標題 Images of Female Soldiers in Russia and China: Chinese Acceptance of the Soviet Film The Dawns Here Are Quiet
3. 学会等名 Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 越野剛
2. 発表標題 Memory of War in Belarus: Literary and Visual Texts
3. 学会等名 the 8th East-Asian conference on Slavic-Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 坂上康博、中房敏朗、石井昌幸、高嶋航 (編著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一色出版	5. 総ページ数 653
3. 書名 スポーツの世界史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	越野 剛  (Koshino Go)  (90513242)	東京大学・大学院人文社会系研究科・助教    (12601)	